

# 「いつでもそこに星はある」 天文文化学とは

Invitation to cultural studies of astronomy

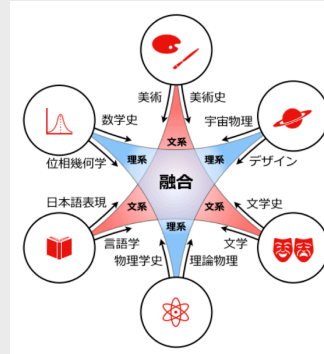
大阪工業大学の各学部に散らばる文系・理系の教員有志がはじめた「天文文化学」創始の活動を紹介いたします。この学問は、広い意味での文化史と科学史の融合を目指す複合領域として、絵画や造形物など人間が生活の中で作り出したあらゆる文化遺産とその創作活動全般を研究対象とします。そして、天文を軸に据えた時間と空間への意識を見直し、科学や文化の目的を再認識しようとする活動です。

## ● 今回の展示セッション

以下のようなテーマでの展示です。どこから見ていただいても構いません。

- セッション1 美術品にみる天文学
- セッション2 文学作品にみる天文学
- セッション3 言語学にみる天文学
- セッション4 学問の受容プロセスにみる天文学
- セッション5 工芸品にみる天文学
- セッション6 現代天文学の抱える謎

## ● 文理融合から文理協働へ



文系理系の垣根を超えて、総合的に理解を進めようとする私たちの姿勢をこの図のような曼荼羅図にしてみました。科研費申請の際に用いました(採択されました)。

## ● 日本天文学会誌「天文月報」2021年9月号に、招待論文掲載

[https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/item/114-9\\_573.pdf](https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/item/114-9_573.pdf)  
より無料でダウンロードできます。

天文月報2021年9月号pdf



## ● 思文閣出版より成果をまとめた専門書を出版

「天文文化学序説 分野横断的にみる歴史と科学」(松浦清・真貝寿明編、思文閣出版、2021年12月20日刊行、ISBN 978-4-7842-2020-5)

## ● メンバー教員は、要望にお応えして、各地で講演を引き受けています。

西宮市宮水学園、毎日文化センター、朝日カルチャーセンター、岸和田健老大学 公開専門講座、大阪市立科学館x大阪中央公会堂、奈良シニア大学、サークルすばる、舞鶴高専 ジュニアドクター養成塾、奈良学ナイトレッスン、ポッドキャスト【ヒマラボ】、webメディア「ほとんど0円大学」ほか

## ● 研究班メンバー

真貝寿明 (大阪工業大学情報科学部)  
松浦清 (大阪工業大学工学部)  
井村誠 (大阪工業大学知的財産学部)  
塚本達也 (大阪工業大学工学部)  
鳥居隆 (大阪工業大学R&D学部)  
横山恵理 (大阪工業大学情報科学部)  
米田達郎 (大阪工業大学工学部)

## ● より詳しくは、天文文化学ホームページ

<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/>

(配布している葉にQRコードがあります)

天文文化web



● 本展示は、科研費 挑戦的研究(萌芽)(2019-2021年度、課題番号19K21621)「天文文化学の創設：天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速」の活動の1つとして企画しました。

### 「天文文化学」創設の試み

真貝寿明<sup>1</sup>・松浦清<sup>2</sup>・  
米田達郎<sup>3</sup>・横山恵理<sup>4</sup>

<sup>1</sup>大阪工業大学情報科学部 〒573-8586 大阪府守口市北山1-79-1  
<sup>2</sup>大阪工業大学工学部 〒535-8585 大阪府大阪市東区5-14-1  
e-mail: shinkai@oit.ac.jp, kiyoshi@oit.ac.jp, tatsuro@oit.ac.jp, rui@oit.ac.jp

天文現象は人間の生活に実用的な学問を成立させた。天文学はもっとも歴史がある身近な科学であり、近代科学が実用科学の確立から始まったことは歴史のことである。それとともに、天文現象は文学や美術などにも影響を与え、人々の生活に潤いを与えてきた。私たちは、広い意味での文化史と科学史の融合を目指す複合領域として「天文文化学」を創設しようとする。また、提案段階にすぎないが、その目指す方向を関係者の皆様と共有したい。本稿では、我々の取り組み始めた科学史・言語学・文学・美術のトピックからのアプローチを紹介する。

#### 1. 天文学は科学や文化の出発点

夜空に輝く天体は、文明の誕生以来、人々を魅了し、知的好奇心を喚起させてきた。曆を作るために太陽や月の運動が利用され、奇妙な動きを見せる惑星の運動は呪いに利用された。星空が我々に与える印象は、世界各地で宇宙観を形成させ、さまざまな宗教を創出した。そして、天体の運動を説明する努力が、近代物理学を完成させ、自然現象に対する科学的なアプローチを確立させた。

この一連の動きは、現代にいたっては継続されている。現代の天文観測は、可視光による観測の他に、赤外線・電波・X線・ガンマ線など異なる波長帯での電磁波観測に拡張され、宇宙に存在するさまざまな天体現象を明らかにし、より遠くより過去の宇宙の姿を明らかにしようとしている。2016年には、重力波観測が実現したことも報告され、新たな「目」を手に入れた我々は、光を放たないブラックホールや宇宙の最期の瞬間を得る手段を手に入れた。宇宙の成り立ち

第114巻 第4号

573

# 「いつでもそこに議論ある」 天文文化研究会

## Workshop on cultural studies of astronomy

天文文化研究会



私たち研究班は、専門家どうしの研究交流のため、研究会を年に2-3回のペースで開いています。

以下は、最近の講演リストです。詳細は、<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/workshop.html>

日時	講演者（敬称略）
第22回 2021年12月5日	勝俣 隆 三途の川は天の河 西尾元伸 泉鏡花『湯島詣』再読 — 「流れ星」を起点として— 竹迫 忍 北極星による古代の正方位測量法 - 宮殿の正方位化にみる飛鳥時代の変革 - 井村 誠 南方熊楠の英文論考「宵の明星と暁の明星」 --Hesper and Phosphor-- 横山恵理 『新板絵入 伊勢物語』貼付「たなばた歌づくし」の紹介 ほか
第21回 2021年7月5日	松浦 清 久保田桃水<雪之図>の写生的風景 月を描く絵画の構図に見る時間解釈を中心に 大西浩次 市民科学としての「長野県は宇宙県」の近代天文学史100年 西村昌能 フツヌシと古代銅鏡 米田達郎 江戸庶民は『火星』をどのように認識していたか 井村 誠 南方熊楠の英文論考「東洋の星座」 --The Constellations of the Far East-- 鳥居 隆 魅惑のアストロラーベ 横山恵理 『大乘院寺社雑事記』における祈雨 作花一志 改定太陽暦 真貝寿明 明治はじめの窮理熱と『滑稽窮理 臍の西國』
第20回 2020年12月5日	玉澤春史 天変地異の記録を用いた歴史科学技術社会論試論 Sang-Hyeon Ahn The instruments developed during the reign period of King Sejong the great and its applications 岩橋清美 オーロラと近世社会 -- オーロラをめぐる人々の意識と記録のあり方 -- 北井礼三郎 明治4年12月のオーロライベントの飛騨高山での記録 陶山 徹 長野県天文文化研究会の活 -- 長野県は宇宙県 -- 吉田 薫 堺・正覚寺 須弥象碑、須弥山儀について
第19回 2020年9月5日	嘉数次人 18世紀末の寛政改暦事業初期における幕府と土御門家 作花一志 超新星出現の目撃者 --- 「平安陰陽師の見た客星」「戦国時代に現れた客星」「最古の超新星出現記録」 真貝寿明 志筑忠雄が取り組んだケイルの物理学書の位置づけ
第18回 2019年10月26/27日	山下克明 星座木簡と古代の星図 勝俣 隆 星座神話としての日本神話研究の達成と課題 米田達郎 江戸の科学書を中心に見た十二宮の名称について—双児宮を中心— 西村昌能 記紀に見られる星の神様 経津主考 松浦 清 星曼荼羅研究の課題 真貝寿明 科研費研究課題『天文文化学の創設』の目指すもの
第17回 2018年11月24日	松浦 清 『宿曜経』算曜直章と円形星曼荼羅の制作背景 塚本達也 算曜直章による曜日の計算について
第16回 2017年9月16日	横山恵理 『恋路ゆかしき大将』に描かれた星 清水 健 春日龍珠箱に描かれた十二宮をめぐる
第15回 2016年9月3日	山下克明 宿曜道と属星秘法伝承 真貝寿明 麻田剛立とケプラーの惑星運動の第3法則
第14回 2015年12月26日	永原順子 『土左日記』の天文気象を考える -- 土佐の気象と貫之の宇宙観 -- 松浦 清 『片袖縁起』に描かれた月の表現 -- 絵画の中の時刻と方位 --